私のチェーホフ

佐々木基一

のチェーホフ

佐々木基一

江苏工业学院图书馆
藏书章

講談社

私のチェーホフ
一九九〇年八月三〇日 第一刷発行
一九九〇年一〇月二五日 第二刷発行
著者——佐々木基一
© Kiichi Sasaki 1990, Printed in Japan

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一 郵便番号一二一 電話東京〇三—九四五—一二一一（大代表）
印刷所——株式会社大日本印刷 製本所——加藤製本株式会社
定価——二五〇〇円（本体二四二七円）
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-203362-3 （文1）

目

次

作品の生命——チェーホフ私観——　7
私のチェーホフ　29
素直な心をもって　31
初期短編について　39
そのはげしさについて　47
恋愛について　54
(続)恋愛について　62
軽みについて　80
サハリンの旅の前と後　104

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

中編小説について　127
幸福の拒否　150
小説と戯曲　171
昇華の方法　185
ドラマのないドラマ　200
悲劇か喜劇か　217
あとがき　238
年譜　244
索引

装丁　田村義也

私のチェーホフ

作品の生命——チェーホフ私観——

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

年少の頃、チェーホフの短編をはじめて読んで以来今日まで、わたしはチェーホフの愛好者であり続けている。年齢も、すでに四十四歳で死んだチェーホフの生涯を遠のむかしに越えてしまったにもかかわらず、わたしは依然としてチェーホフの魅力を忘れることができない。いまでも、ときどき、チェーホフの作品のどれかを、そのときの気分や要求に応じて読みかえすならわしになっている。何度読みかえしても飽きないし、久しぶりに読みかえしてみると意外につまらなかった、という苦い発見をしたことなど一度もない。これは、わたしがいまだにチェーホフを底の底まで味読しつくしていないということを意味するものにほかならないだろう。チェーホフなどはとっくの昔に卒業した、とはわたしにはとうてい言えないのである。

といって、わたしは、かつての広津和郎氏のように「チェエホフの幽霊」にとりつかれているわけではない。

「チェエホフの幽霊」からほんとうに離れてしまわなければ、手も足も出ないと思う。泣き笑いなどには用はないと思う。涙のユーモアなどに用はないと思う。いくらチェエホフが人間というものを深く知っていたからと云って、彼の知り方からはもう今後学ぶべきものはなにもないと思う。

私はこの作家を「臨終に思い出す作家」だと言ったことがある。いよいよ死ぬ時になって、若し人生の総経験、総体の姿が、一瞬の間に思い出されるものであったら、その時、太陽、月光、空気、青空、それから肉親や愛人などと共に、チェエホフの蒼白き笑いが浮んで来るかも知れないと思う、その位、彼は私の心にこびりついてしまっている。

（「わが心を語る」）

広津氏がこう語ったのは、昭和四年のことだった。大正時代の半ばから昭和のはじめにかけて、日本の文学者、演劇関係者、インテリのあいだに、人生のいとなみのむなしさを歌う白鳥の歌の作者として、チェーホフのペシミスティックな側面が大きな魅力をもっていたことはたしかな事実である。そして、広津氏はそういうチェーホフと訣別することなしには、もはや一歩も前に進めないと感じたのであるが、この告白は、当時におけるチェーホフの影響の深さと大きさを物語るものにほかならないだろう。

しかし、少年のわたしがはじめてチェーホフを読んだのは、ちょうど広津氏が「チェエホフ

の幽霊」から離れてしまわなければ、手も足も出ないと語った昭和四年か五年頃のことであった。ということは、わたしは特定の時代思潮や時代の文学的雰囲気のなかでチェーホフを読んだわけではなく、したがってまた、広津氏のように「人生観の上に食い込ん」でくるような大きな影響を必ずしもチェーホフから受けなかったということである。少年のわたしがチェーホフに魅力を感じたのは、たぶん、気質的な親近性によるものであったろう。あるいは、当時はまだはっきりと意識しなかったけれども、あの刻々に交替する快活な気分と憂鬱な気分のなかに写し出される自然や人生の姿に、きわめて身近なものを感じたためかも知れない。チェーホフの作品は、身近な世界のうちにひそむ、何かこう得体の知れないもの、それが人間を生かしもし殺しもする不思議な力、それこそわれわれの生活を底で支えているような感じのするもの、そういうものにわれわれを接触させてくれるような気がしたのである。

チェーホフの生き方とその作品を貫いている、意力あふれる強さ、やむことのない探求の意欲、強烈な意志、この世のことは何ひとつわかりはしない、という彼の中期作品の主人公たちの苦悩する懐疑のなかに含まれている切断の意志のうちにソクラテスのそれに似た賢さを発見することができるようになるまでには、かなり時間がかかったが、そういう認識に道をひらいてくれる機会がやがてやってきた。それはわたしの二十代の全部を埋めつくしたあの戦争の季節であった。一八八〇年代、九〇年代のロシアの灰色の時代に、壁に頭をぶっつけて泣きわめ

きもせず、ガルシンのように階段から身を投げてみずからを滅しもせず、出来合いの思想でみずからの空虚さをおおい隠そうともせず、ともすればおちこみそうになる底なしのペシミズムやニヒリズムとたたかいながら、たえず前方をみつめつつ、忍耐強く、健気に生きつづけたチェーホフの気持が、わたしにもいくらか解ってくるような気が、そのときしたものだ。わたしはその頃、『大学生』（一八九四年）という短編を読んで、こみあげてくる涙をおさえることができなかったことを思い出す。暗い寒い、荒涼とした夜の草原を、暗い気分をいだいて一人の青年が、家に帰って行く。彼はあたりの風景に目をやりながら、「同じような穴だらけの藁屋根や、無知や、憂鬱や、同じような荒涼たる周囲や、暗闇や、圧迫感や、――そうしたいっさいの恐ろしさは過去にもあったし現在にもあり、また未来にもあるだろう。そうしてもう千年たったところで、人生はよりよくはなるまい。」というような考えに滅入りこんでいる。途中で彼は、百姓の寡婦たちが焚火しているところに出くわし、焚火にあたりながら、使徒ペテロもちょうどこんなふうな寒い夜に焚火にあたったのだろうと思う。そして寡婦たちに、ペテロが鶏の鳴くまでに三度イエスを拒んだ話をしてやる。イエスの弟子であることを三たび否定したペテロが、祭司長の中庭から出て、身も世もあらず泣きだした、というところまでくると、その場に居合せた寡婦の頬を伝って大粒の涙がはらはらと流れ落ちるのを彼はみた。寡婦たちと別れて帰る路々、彼はふと寡婦たちがあの話に感動して泣きだしたのは、ペテロの心に起った

ことに、彼女は身近なものを感じ、身も心も打たれたためにちがいないと思う。新たな感動と喜びがこの青年の心にわきおこってくる。「過去は、――と彼は考えた――一つまた一つと流れ出す、ぶっつづきの鎖のような事件によって、現在と結びついているのだ。こう思うと、彼はたった今自分がこの鎖の両端を見たような気がした。いっぽうの端に触れたら、もういっぽうの端がぴくりとふるえたような気がした。」――こうしてこの青年は、いまや最初とはうってかわり、「幸福の、眼に見えぬ神秘的な幸福の、言いしれぬ甘い期待」に心を捕えられて、家路につくのである。

チェーホフからわたしは、思想的、観念的な意味での人生観上の影響はなにひとつ受けなかった。ただ、わたしはチェーホフから、人間が生きて行くことの、喜びとつらさとを、そしてまた、いかにささやかなものであれ、われわれの生をどこかで支えている真実と美への夢や憧憬を、また生きて行くための意力と勇気とを教えられた。

イリヤ・エレンブルグは、チェーホフ生誕百年祭を前にした一九五九年に、チェーホフの作品を読みかえして、チェーホフの永続的な魅力の源泉はいったいどこにあるのだろうかと考えている。

スタンダールは「特定の立場に帰依することによって、人間の中にひそむ熱情をさえぎらないようにしなければならぬ。五十年もすれば特定の立場の人間など、もうだれも感動

させることができなくなってしまうだろう。言葉を変えて言えば、歴史が判決を下した後でも依然として面白いものとして残るものだけが書くに価するのだ」と書いている。私にはこの言葉が最も正確にチェーホフの作品の生命を説明していると思われる。歴史はずっと以前に、医者のリヴォフや『公爵夫人』や可哀想なミシュースや高官オルロフの軽蔑すべき息子や、チェーホフの他の主人公たちに判決を下した。現在私たちに興味があるのは、この人たちが新聞を見て何を議論したかではなく、彼らが何によって生きたかということだ。彼らの愛や苦しみや喜びは、われわれが同時代人たちを自ら理解するための助けになっている。(イリヤ・エレンブルグ『チェーホフ——作品を読みなおして』篠原茂訳)

——エレンブルグのこうした至極当り前の発言は、明らかに作品のなかにただ時代の反映やイデオロギー的立場だけをみて、それで満足してしまう千からびた図式的評価にたいする反撥を含んでいて、かなり論争的な意味をもつものであるが、チェーホフに関しては、わたしもまたエレンブルグと同じように、当り前の真理を当り前のこととして認める以外にないような気がする。チェーホフの魅力、それはあの大学生がペテロの話をしたとき、鎖の一方の端にふれたために、もう一方がうごいたのだと感じたように、八十年前のチェーホフの物語が現代という鎖の一端にいるわたしの心を強くうごかす点にあるのだ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo